小学校におけるハンドボールの教材づくりに関する研究
―下位教材としての基礎ゲームの検討を中心に―

石垣　直樹（学校教育課程・教科教育実践選修）

＜序論＞　研究動機・研究目的・研究方法

著者は、部活動を通し、７年間ハンドボールに親しんでいる。多くの団体競技を経験してきたが、ハンドボールは最も楽しいものであると感じている。しかし一般的に多くの人に知られている競技ではなく、ほとんどの人は名前を聞いたことがある程度だと思われる。小学生に教材づくりを工夫してハンドボールの楽しさを伝えることができれば、多くの人にこの競技を知ってもらう良いきっかけとなるだろう。子どもたちが中学、高校、大学等で様々な球技と関わるとき、基礎・基本となる動きをハンドボールを通して養うことができるだろう。

小学生の子どもたちにハンドボールという競技を理解してもらうとき、まずもって大切にしたいことは、とっつきやすく親しみやすいものであるということである。そのためには、楽しさやおもしろみを授業の中で伝えていく必要がある。しかし、当然、ハンドボールの特性を考慮した内容でなければならない。部活動を通して、知らず知らずに学んできたハンドボールの楽しさだけでなく、教材価値をしっかりと捉えていきたいと思う。様々な場づくりをすることで自然に生まれてくる子どもたちの動きの様相を目にし、その様相はハンドボール独自の構造特性によるものなのかを研究したい。

本研究では、学校現場にハンドボールの授業を取り入れている秋田大学教育文化学部附属小学校のご協力を得て、下位教材の取り扱い方の研究を中心に、教材としてのハンドボールの有効性を明らかにすることを目的とする。下位教材を授業の中で上手に扱うことで、ハンドボールに対する子どもたちの興味関心を高めることができると考える。

研究の方法として、秋田大学教育文化学部附属小学校の二年生を対象とし、下位教材を授業の中に取り入れた体育授業を分析する。計 12 時間の授業計画を立て、６種類の下位教材を子どもたちに紹介する。下位教材として基礎ゲームを準備し、遊び的なゲームの中にもハンドボールの特性を意識したものを扱うこととする。

授業の全てをビデオで撮影し、学年に応じた基礎ゲームの選択の必要性や、個々の基礎ゲームによって現れる子どもたちの動きの様相を分析する。

＜本論＞　第一章　ボールゲームの特性（とくにチームゲームについて）

ここでは、決断（判断）を伴うボールゲーム、ハンドボールの構造特性、戦術学習の意義についてまとめ、ハンドボールは基礎ゲームを効果的に取り入れられることを明らかにする。

基礎ゲームの種類やルールを工夫するとき、ハンドボール独自の構造特性をしっかりと把握しておく必要があった。

第二章　下位教材について

ここでは、下位教材の意義、タスクゲームとドリルゲーム、基礎ゲームと目標ゲームについてまとめ、それぞれを下位教材として扱う際の注意点等を研究する。特に、タスクゲームとドリルゲームの関係を、基礎ゲームや予備ゲーム、目標ゲームの視点から捉えなおした。

基礎ゲームや予備ゲーム、目標ゲームで扱う教材内容をしっかりと確認し、認識することが重要であった。

第三章　秋田大学教育文化学部附属小学校での実践例の考察

ここでは、フィルム、およびビデオによる観察法を用いて研究を進め、授業の単元名、構想、各種基礎ゲームの内容と予想される子どもたちの動きについて明らかにしようとした。また、実践例で見られた特徴を挙げ、学年と技術習熟に応じた基礎ゲームの選択の必要性を確認しようとした。

学年や技術に応じた基礎ゲームを選択できないと、子どもたちの動きの様相に発展が見にくくなる。知らず知らずに動き方を工夫したり、情況を判断する力が子どもたちに身につくよう、的確な教材を準備する必要があった。

＜結論＞

本研究は、下位教材としての基礎ゲームの検討を中心に、小学校におけるハンドボールの教材づくりに関して行った。下位教材の意義を確認するとともに、対象学年や、子どもの能力に応じ、基礎ゲームを選択する必要性を明らかにしていくことを目的として行ったものである。

研究を進めていく中で、ドリルゲームの捉え方、基礎ゲームの捉え方について、著者自身あいまいな部分があったことに気付いた。しかし、ゲームの内容を工夫することによって、改善できることを学んだ。

基礎ゲームを下位教材として扱う場合、また、楽しい体育の実現のために教材づくりを工夫する場合、いずれにおいても、柔軟な姿勢と適切な判断が重要であろう。目標ゲームを反復するのではなく、基礎ゲームを事前に取り入れたことで、子どもたちの動きの様相の発展に効果的な影響を与えることができたと思われる。今後の課題として、より多くの意義ある基礎ゲームの発想が必要であること。また、基礎ゲームは情況に応じて、常に、柔軟な姿勢で取り扱うことが重要であることを認識しなければならない。

＜引用・参考文献＞

林恒明（１９９２）、体育科典型教材づくり、日本書籍、ＰＰ．１８－２１

佐藤靖（２００１）、簡単、楽しい、盛り上がるだけのボールゲームでいいのか、学校体育（７）、ＰＰ．６－８

Ｇ．シュティーラー他著（唐木國彦監訳１９９３）、ボールゲーム指導辞典、大修館書店、ＰＰ．１－４１９

他